

野生生物をめぐる問題を考える

—2008～2021年の野生生物に関するニュースをふりかえって

本田裕子

人間環境学科・公共政策学科 教授
専門分野：環境社会学、野生生物保護

キーワード：野生生物 10 大ニュース、「野生生物と社会」学会、保護、獣害

1. はじめに

本報告では、野生生物をめぐる問題について、どのようなニュースが注目されているのかをふりかえることで検討したい。

野生生物をめぐる問題は、日本の SDGs (持続可能な開発目標) の取り組みにおいても重要なトピックスの一つといえる。SDGs の進捗状況に関する“Sustainable Development Report 2022”¹⁾では、日本の 17 のゴールに関する取り組みのうち、評価が「Stagnating (停滞)」とされたのがゴール 14「海の豊かさを守ろう」とゴール 15「陸の豊かさも守ろう」であり、ゴール 15 の取り組みでは「レッドリスト指数」²⁾の後退が記載されている。日本の SDGs の取り組みを推進する上で、野生生物をめぐる問題を改善していく必要があり、本報告では具体的にどのような問題があるのかを把握する上で、野生生物に関するニュースに着目することにした。

方法として、筆者が所属している「野生生物と社会」学会³⁾が毎年会員からの投票をもとに選定している「野生生物 10 大ニュース」⁴⁾を用いて、野生生物に関するニュースとしてどのようなものがあるのか、その傾向について整理を行う。

なお、今回用いる「野生生物 10 大ニュース」は、野生生物に関する知識、関心のある学会員が選定・投票して決めたものであり、これらのニュースを一般市民の興味関心の高かったニュースとして捉えることは早計である。しかし、野生生物に関する知識や関心を有する人たちが選ぶニュースだからこそ、それらのニュースは野生生物をめぐる問題を考える上で信頼できる情報と位置づけることができるため、本報告では野生生物をめぐる問題を把握するために用いることとする。

2. 野生生物に関するニュースをふりかえる

「野生生物と社会」学会では、「野生生物 10 大ニュース」を、2008 年から 2021 年の毎年選定している。ここでは、各年の 10 大ニュースを紹介したい。なお、この 10 大ニュースは、学会の行政研究部会で候補を選定し、会員の投票により 10 のニュースを選定する。順位づけはされておらず、時期が特定できるものについては時系列に並べたものであること、そして会員の投票によっては同数となり 10 ではなく 11 のニュースがあるとの説明も記載されている。

2008 年

- ・アホウドリ新繁殖地形成でヒナ移送 (2 月)
- ・十和田湖の水鳥から鳥インフル (5 月)

- ・米でホッキョクグマが絶滅危惧種に（5月）
- ・生物多様性条約 COP10 名古屋開催決定（5月）
- ・生物多様性基本法の制定（6月）
- ・西表島でヤマネコ保護の町条例可決（6月）
- ・ルリカケス、国内希少種初の指定解除（7月）
- ・佐渡で人工増殖トキを野生復帰（9月）
- ・泡瀬干潟埋立で那覇地裁が差止判決（10月）
- ・野生生物保護学会行政研究部会発足（11月）

2009年

- ・ラッコのクーちゃんて釧路川賑わう（2月）
- ・鹿児島本土でマングース初確認（6月）
- ・白山で70年ぶりにライチョウを確認（6月）
- ・日獣大と群馬県が野生動物対策協定（6月）
- ・乗鞍で観光客9人がクマに襲われる（9月）
- ・政権交代で環境政策にも大転換（9月）
- ・軈の浦の埋立架橋、一審で差止判決（10月）
- ・佐渡放鳥トキが集団化、本土飛来も（10月）
- ・鳥獣害対策等も事業仕分けの対象に（11月）
- ・国内外来トカゲに希少種でも駆除要望（11月）

2010年

- ・佐渡で訓練中のトキをテンが襲撃（3月）
- ・奈良公園のシカをボウガンで殺傷（3月）
- ・生物多様性国家戦略 2010 の閣議決定(3月)
- ・CITES 会議でクロマグロ取引規制否決（3月）
- ・静岡県でかみつきザルが大暴れ（8～9月）
- ・2006年に次ぐクマ大量出没で事故多発（9～11月）
- ・愛知名古屋で COP10 開催。画期的成果（10月）
- ・生物多様性保全活動促進法が成立（12月）
- ・西湖で田沢湖産絶滅クニマスを再発見（12月）
- ・諫早湾干拓の開門判決に国が上告断念（12月）

2011 年

- ・愛知、宮崎等でトリインフルエンザ（1～2 月）
- ・再導入アホウドリが小笠原諸島に帰郷（2 月）
- ・東日本大震災、津波で甚大な自然災害（3 月）
- ・原発事故で野生鳥獣にも出荷停止（3 月）
- ・小笠原諸島が世界自然遺産に登録（6 月）
- ・環境省が鳥獣保護事業基本指針を改定（9 月）
- ・日本調査隊、ブータンで幻の大蝶確認（10 月）
- ・荒川にゴマフアザラシ「あらちゃん」（10 月）
- ・札幌で市街地でのヒグマ出没相次ぐ（10～11 月）
- ・沖縄で外来蛇タイワンスジオの買上事業（11 月）

2012 年

- ・野生鳥獣に放射性物質が検出され摂取制限！
- ・カワウソ絶滅宣言！
- ・野生化トキのふ化（4 月 22 日）、8 羽全羽巣立ち（6 月 21 日）！
- ・第 4 次レッドリスト発表（8 月 28 日）
- ・福島県等の狩猟者減少！
- ・ラムサール条約の新規登録地決まる！
- ・宮崎県綾地域がユネスコ MAB「エコパーク」に登録！（7 月 11 日）
- ・“絶滅”のミズナギドリ小笠原に生息！（2 月 8 日）
- ・旭山動物園（北海道旭川市）のフラミンゴが脱走、捕獲できず！
- ・アフリカに世界最大の自然保護区誕生！（3 月 5 日）

2013 年

- ・ダイオウイカの生態動画を世界で初めて撮影（1 月）
- ・EU がミツバチ激減でネオニコチノイド系農薬を規制（5 月）
- ・ウズラの狩猟鳥獣指定が解除され、希少鳥獣に（6 月）
- ・種の保存法改正（6 月）
- ・福島第 1 原発周辺でイノシシやサルが昼間住宅地周辺に出没（7 月）
- ・白神山地、世界遺産にシカ迫る（10 月）
- ・ツシマヤマネコ 15 年間無断飼育に嚴重注意（11 月）

- ・鳥獣保護法改正に向けてのパブコメ実施（11月）
- ・ニホンジカ捕獲目標数設定へ（12月）
- ・狭山丘陵、キタリス繁殖野生化国内初確認（12月）
- ・クマが金沢城に登城！で公園が一日閉鎖（12月）

2014年

- ・慶良間諸島国立公園が誕生。日本の国立公園は31に（3月）
- ・国際司法裁判所で日本の南極海調査捕鯨に中止命令（4月）
- ・改正鳥獣保護法が公布（5月）
- ・皇居で新種見つかる、フキアゲニリンソウなど（5月）
- ・ニホンウナギ、IUCNで絶滅危惧IB類に（6月）
- ・外来生物法が改正され、交雑種も特定外来生物の対象に（6月）
- ・地域自然資産法が議員立法で成立（6月）
- ・ツキノワグマ大量出没&人身事故（8～10月）
- ・デング熱感染者続出で都市公園も閉鎖に（9月）
- ・小笠原で中国漁船団が宝石サンゴを大規模密漁（11月）

2015年

- ・オオタカの国内希少動植物種からの指定解除の検討
- ・東京都葛西臨海水族園でマグロ、カツオが大量死（1月）
- ・小笠原でヒナの移送により戦後初めてアホウドリが繁殖に成功（3月）
- ・WAZAの勧告によりJAZAが大地町の追い込み漁からのイルカ入手を禁止（5月）
- ・改正鳥獣保護法施行（5月）
- ・西伊豆町、自作の電気柵で2名感電死された事件（7月）
- ・ニホンザルがライチョウのヒナ捕食 調査で確認（9月）
- ・ツマアカスズメバチ：巣と個体 北九州市で確認（9月）
- ・コウノトリ放鳥開始10年 飛来40府県に 豊岡（9月）
- ・カナダガン根絶成功のニュース（12月）

2016年

- ・西表石垣国立公園が大規模拡張（4月）
- ・米動物園で来園者の子供を守るためゴリラ射殺に批判殺到（5月）
- ・ツキノワグマ人身事故4名死亡 駆除のクマの胃から人体の一部 襲って食べたか

秋田鹿角市（6月）

- ・北海道でマダニ媒介性脳炎による死亡者が発生（8月）
- ・沖縄本島北部「やんばる」、国立公園指定（9月）
- ・西之島に上陸 噴火後初、火山活動や生物調査（10月）
- ・鳥インフルエンザ レベル3（国内複数箇所発生時）に変更（11月）
- ・国内最大のサンゴ礁、半分以上が死滅 97%が白化（11月）
- ・イノシシに襲われ死亡（群馬県桐生市）（11月）
- ・兵庫県で20年ぶりにツキノワグマ狩猟を解禁（11月）
- ・2日までに37案件の鳥インフルエンザウイルスが野鳥等で検出（12月）

2017年

- ・「奄美群島国立公園」が誕生しました！（3月）
- ・大阪府警が国産メジロ違法飼養で12人の家宅捜索、168羽を押収（5月）
- ・鳥獣害対策、ジビエ頼みに警鐘 商品化でミスマッチも（5月）
- ・強毒「ヒアリ」国内初確認 環境省「侵入否定できぬ」（6月）
- ・コウノトリ、ついに全都道府県で確認 放鳥開始後12年（8月）
- ・もしかしてニホンカワウソ？対馬で撮影 12年に絶滅種（8月）
- ・仙台でプロ野球の試合が鳥襲来のため試合再開できず（8月）
- ・鳥獣捕獲、水増しに防止策 証拠写真を厳格化・「尾」提出 農水省方針（8月）
- ・オオタカの希少鳥獣の指定解除（9月）
- ・国内希少野生動植物種の新規指定（9月）
- ・特定外来生物「タイワンザル」、和歌山で根絶宣言へ（11月）

2018年

- ・約103年ぶりの新種のサクラをクマノザクラと命名（3月）
- ・奄美沖縄の世界自然遺産登録延期、推薦取り下げ再推薦へ（5～11月）
- ・長崎県・対馬で見つかった野生カワウソ、ユーラシアカワウソの近縁種3匹が生息の可能性（5月）
- ・利尻島にヒグマが106年ぶりに上陸（6月）
- ・海洋プラスチック問題がG7など国内外で大きな議論に（6月）
- ・奄美大島で生態系保全のためのノネコ捕獲事業を開始（7月）
- ・長野県中川村でブッポウソウが消え JR 東海がリニア関連工事を中断（7月）
- ・岐阜県で豚コレラ発生、野生イノシシにも拡がる（9月）

- ・欧州議会、海洋生物保護のため使い捨てプラスチック製品の使用禁止を可決（10月）
- ・北海道でシカ狩猟中の誤射により国有林職員死亡（11月）

2019年

- ・レッドリスト見直し、トキが野生絶滅から絶滅危惧種へ（1月）
- ・豚コレラ感染拡大で野生イノシシにワクチン餌投与（1月）
- ・豪でネズミの一種、地球温暖化影響で哺乳類初の絶滅か（2月）
- ・石川県七ツ島で大島でアナウサギの根絶に成功（6月）
- ・IWC 脱退手続き完了で31年ぶりに商業捕鯨を再開（7月）
- ・ヒグマの駆除、北海道（8月）
- ・CITES でコツメカワウソ国際取引禁止を決定（8月）
- ・ヒアリ、国内で初定着か 東京港、拡散の恐れも（10月）
- ・特定外来生物のシロアゴガエル根絶 沖縄・西表島で全国初（10月）
- ・森林火災で大量死、コアラ絶滅の危惧強まる オーストラリア（11月）
- ・高山生態系10道県で危機、今世紀末推計 温暖化で生息地失う（12月）

2020年

- ・山梨県猟友会、シカ捕獲数水増しで過大受給（3月）
- ・プラスチック製買物袋有料化2020年7月1日スタート（7月）
- ・国連報告書、動物由来の感染症は今後も増え続ける恐れと発表（7月）
- ・モーリシャスマングローブが重油まみれ、回復に30年？貨物船座礁（8月）
- ・野生生物が「壊滅的減少」過去50年で3分の2が減る—WWF（9月）
- ・生物多様性「愛知目標」達成できず（9月）
- ・菅首相が「国際公約」温室ガスを2050年に実質ゼロ（11月）
- ・気象庁動植物観測の9割を年内で廃止へ「さくら」は観測継続（11月）
- ・ミンクから新型コロナ変異種確認、デンマークでは1700万匹を殺処分へ（11月）
- ・受難のコアラ6万匹超豪の大規模森林火災—WWF（12月）

2021年

- ・米バイデン政権誕生で世界の気候変動対策が加速（1月～）
- ・「豚熱発生がイノシシの広域的な分布に与える影響をはじめて把握」（池田・浅野・鈴木, *Journal of Veterinary Medical Science*）（3月）
- ・カブトムシの常識、埼玉の小6が覆す 世界的雑誌に論文（5月）

- ・自然公園法改正 特別地域で野生動物への餌付けを禁止 (5月)
- ・沖縄のジュゴン絶滅との論文発表が波紋広げる (5～6月)
- ・北海道池田町で被害農家の男がタンチョウを射殺 (6月)
- ・札幌市東区でヒグマが暴れ 4人が負傷(6月)：北海道でヒグマによる死傷者過去最多 (6～7月)
- ・「奄美・沖縄」世界自然遺産に登録 延期勧告を乗り越え (7月)
- ・小笠原の海底火山で発生した軽石が奄美沖縄から関東に大量漂着 (10月～)
- ・ヒグマ駆除で発砲、安全性巡り対立 猟銃許可取り消し訴訟 17日判決 (12月)

3. 野生生物をめぐるニュースを整理する

2008年から2021年まで計144件のニュースが選定されていた。ここでは、144件のニュースを生物、地名、内容で整理をする。なお、時期については、2008年から2021年の14年間を前期(2008年～2012年)、中期(2013年～2017年)、後期(2018年～2021年)と分けて整理する。

3-1. 生物

本報告では、3回以上登場している生物7種を紹介する。

(1) ツキノワグマ (6回登場)

ツキノワグマが登場していたニュースは以下となる。なお、ニュース内に「クマ」と記載のあるものは、本州に生息しているツキノワグマと推定した。14年間でいえば、前期と中期のニュースであり、内容は人身事故、市街地での出没となる。

2009年：乗鞍で観光客9人がクマに襲われる (9月)

2010年：2006年に次ぐクマ大量出没で事故多発 (9～11月)

2013年：クマが金沢城に登城！で公園が一日閉鎖 (12月)

2014年：ツキノワグマ大量出没&人身事故 (8～10月)

2016年：

- ・ツキノワグマ人身事故4名死亡 駆除のクマの胃から人体の一部 襲って食べたか 秋田鹿角市 (6月)
- ・兵庫県で20年ぶりにツキノワグマ狩猟を解禁 (11月)

(2) ヒグマ (5回登場)

ヒグマが登場していたニュースは以下となる。14年間でいえば、前期と後期のニュースであり、特に後期では4件選定されている。内容は前述のツキノワグマと同様に人身事故、出没や駆除となる。

2011年：札幌で市街地でのヒグマ出没相次ぐ（10～11月）

2018年：利尻島にヒグマが106年ぶりに上陸（6月）

2019年：ヒグマの駆除、北海道（8月）

2021年：

- ・札幌市東区でヒグマが暴れ4人が負傷(6月)：北海道でヒグマによる死傷者過去最多(6～7月)
- ・ヒグマ駆除で発砲、安全性巡り対立 猟銃許可取り消し訴訟17日判決(12月)

(3) ニホンジカ (5回登場)

シカ(ニホンジカ)が登場していたニュースは以下となる。北海道に生息しているエゾシカも含めている。14年間でいえば、前期、中期、後期でそれぞれニュースが挙げられており、捕獲にまつわるニュースだけでなく、虐待、誤射や捕獲数水増しといった人間側に注目したニュースも含まれる。

2010年：奈良公園のシカをボウガンで殺傷（3月）

2013年：

- ・白神山地、世界遺産にシカ迫る（10月）
- ・ニホンジカ捕獲目標数設定へ（12月）

2018年：北海道でシカ狩猟中の誤射により国有林職員死亡（11月）

2020年：山梨県猟友会、シカ捕獲数水増しで過大受給（3月）

(4) イノシシ (5回登場)

イノシシが登場していたニュースは以下となる。14年間でいえば、中期、後期でニュースとして選ばれているが、中期では出没・人身事故、後期では豚熱(旧：豚コレラ)に関するニュースへと変化している。

2013年：福島第1原発周辺でイノシシやサルが昼間住宅地周辺に出没（7月）

2016年：イノシシに襲われ死亡(群馬県桐生市)(11月)

2018年：岐阜県で豚コレラ発生、野生イノシシにも拡がる（9月）

2019年：豚コレラ感染拡大で野生イノシシにワクチン餌投与（1月）

2021年：「豚熱発生がイノシシの広域的な分布に与える影響をはじめて把握」
（池田・浅野・鈴木,Journal of Veterinary Medical Science）（3月）

(5) トキ（5回登場）

トキが登場していたニュースは以下となる。14年間でいえば、トキの放鳥が開始された2008年を含めて前期を中心にニュースとして選ばれている。捕獲にまつわるニュースだけでなく、虐待、誤射や捕獲数水増しといった人間側に注目したニュースも含まれる。

2008年：佐渡で人工増殖トキを野生復帰（9月）

2009年：佐渡放鳥トキが集団化、本土飛来も（10月）

2010年：佐渡で訓練中のトキをテンが襲撃（3月）

2012年：野生化トキのふ化（4月22日）、8羽全羽巣立ち（6月21日）！

2019年：レッドリスト見直し、トキが野生絶滅から絶滅危惧種へ（1月）

(6) アホウドリ（3回登場）

アホウドリが登場していたニュースは以下となる。14年間でいえば、アホウドリの移送やそれに伴う繁殖といった出来事がニュースとして選ばれている。

2008年：アホウドリ新繁殖地形成でヒナ移送（2月）

2011年：再導入アホウドリが小笠原聳島に帰郷（2月）

2015年：小笠原でヒナの移送により戦後初めてアホウドリが繁殖に成功（3月）

(7) ニホンザル（3回登場）

ニホンザルが登場していたニュースは以下となる。14年間でいえば、前期と中期でニュースとして選ばれている。内容としては人身事故だけでなく、ライチョウへの被害も含まれている。

2010年：静岡県でかみつきザルが大暴れ（8～9月）

2013年：福島第1原発周辺でイノシシやサルが昼間住宅地周辺に出没（7月）

2015年：ニホンザルがライチョウのヒナ捕食 調査で確認（9月）

3-2. 地名

都道府県を含めて具体的な地名（海外については国名を含む）が見出しにあるニュースは84件あった。その中で、多く登場している、沖縄、北海道、小笠原について、どのようなニュース内容であったのかを取り上げる。

(1) 沖縄（11回登場）

沖縄および県内の地名が登場していたニュースは以下となる。なお、見出しでは具体的な地名はないが、国内最大のサンゴ礁に関するニュースも沖縄として含めて11回の登場となる。14年間でいえば、前期、中期、後期でそれぞれ選ばれているが、「奄美・沖縄」（奄美大島、徳之島、沖縄島北部及び西表島）の世界自然遺産登録やそれに向けた動きに関するニュース（「西表石垣国立公園の公園区域の拡張」「やんばる国立公園の指定」）が複数回選ばれていた。

2008年：

- ・西表島でヤマネコ保護の町条例可決（6月）
- ・泡瀬干潟埋立で那覇地裁が差止判決（10月）

2011年：沖縄で外来蛇タイワンスジオの買上事業（11月）

2014年：慶良間諸島国立公園が誕生。日本の国立公園は31に（3月）

2016年：

- ・西表石垣国立公園が大規模拡張（4月）
- ・沖縄本島北部「やんばる」、国立公園指定（9月）
- ・国内最大のサンゴ礁、半分以上が死滅 97%が白化（11月）

2018年：奄美沖縄の世界自然遺産登録延期、推薦取り下げ再推薦へ（5～11月）

2019年：特定外来生物のシロアゴガエル根絶 沖縄・西表島で全国初（10月）

2021年：

- ・沖縄のジュゴン絶滅との論文発表が波紋広げる（5～6月）
- ・「奄美・沖縄」世界自然遺産に登録 延期勧告を乗り越え（7月）

(2) 北海道（10回登場）

北海道および道内の地名が登場していたニュースは以下となる。なお、見出しでは具体的な地名はないが、ヒグマのニュースも北海道として含めて10回の登場となる。14年間でいえば、前期、中期、後期でそれぞれ選ばれているが、特に後期でヒグマのニュース

を中心に多く選ばれている。内容としてはヒグマに関するニュースが多いが、他にはラッコ、フラミンゴ、マダニ、シカ、タンチョウに関するニュースが選ばれていた。

2009年：ラッコのクーちゃんて釧路川賑わう（2月）

2011年：札幌で市街地でのヒグマ出没相次ぐ（10～11月）

2012年：旭山動物園（北海道旭川市）のフラミンゴが脱走、捕獲できず！

2016年：北海道でマダニ媒介性脳炎による死亡者が発生（8月）

2018年：

- ・利尻島にヒグマが106年ぶりに上陸（6月）
- ・北海道でシカ狩猟中の誤射により国有林職員死亡（11月）

2019年：ヒグマの駆除、北海道（8月）

2021年：

- ・北海道池田町で被害農家の男がタンチョウを射殺（6月）
- ・札幌市東区でヒグマが暴れ4人が負傷（6月）：北海道でヒグマによる死傷者過去最多（6～7月）
- ・ヒグマ駆除で発砲、安全性巡り対立 猟銃許可取り消し訴訟17日判決（12月）

(3) 小笠原（8回登場）

小笠原が登場していたニュースは以下となる。なお、見出しでは具体的な地名はないが、2008年のアホウドリの移送も含めて8回の登場となる。14年間でいえば、前期、中期、後期でそれぞれ選ばれている。内容としてはアホウドリの繁殖、世界自然遺産の登録、ミズナギドリの生息、宝石サンゴの密漁、西之島の生物調査や海底火山で発生した軽石の大量漂着と多岐にわたる。

2008年：アホウドリ新繁殖地形成でヒナ移送（2月）

2011年：

- ・再導入アホウドリが小笠原諸島に帰郷（2月）
- ・小笠原諸島が世界自然遺産に登録（6月）

2012年：“絶滅”のミズナギドリ小笠原に生息！（2月8日）

2014年：小笠原で中国漁船団が宝石サンゴを大規模密漁（11月）

2015年：小笠原でヒナの移送により戦後初めてアホウドリが繁殖に成功（3月）

2016年：西之島に上陸 噴火後初、火山活動や生物調査（10月）

2021年：小笠原の海底火山で発生した軽石が奄美沖縄から関東に大量漂着（10月～）

3-3. 内容 (2008年～2021年)

野生生物をめぐる問題を分類するうえで、ニュースの内容を、(1) 絶滅危惧種に関するもの(保護指定や保護解除、野生復帰も含む)、(2) 獣害等の被害をもたらす野生生物に関するもの、(3) 外来種の侵入や駆除に関するもの、(4) 地球環境問題(地球温暖化防止や生物多様性保全等)の取り組みに関するもの(海外の取り組みも含む)、(5) 鳥インフルエンザ等の感染症に関するもの、(6) 自然環境や生息地の保全に関するもの、(7) その他に分類した。なお、複数にまたがる内容がある場合は、内容から最もあてはまる方に集計した。結果、(1)と(2)が多く分類されたので、ここでは(1)と(2)を取り上げる。

(1) 絶滅危惧種に関するもの(保護指定や保護解除、野生復帰も含む)

整理の結果、38件のニュースがあった。ほぼ毎年ニュースとして選ばれている。トキやアホウドリのような野生復帰・再導入の取り組みもあれば、絶滅や絶滅危惧種指定、またはその解除もニュースとして挙げられている。

2008年：

- ・アホウドリ新繁殖地形成でヒナ移送(2月)
- ・米でホッキョクグマが絶滅危惧種に(5月)
- ・西表島でヤマネコ保護の町条例可決(6月)
- ・ルリカケス、国内希少種初の指定解除(7月)
- ・佐渡で人工増殖トキを野生復帰(9月)

2009年：

- ・白山で70年ぶりにライチョウを確認(6月)
- ・佐渡放鳥トキが集団化、本土飛来も(10月)

2010年：

- ・佐渡で訓練中のトキをテンが襲撃(3月)
- ・CITES会議でクロマグロ取引規制否決(3月)
- ・西湖で田沢湖産絶滅クニマスを再発見(12月)

2011年：

- ・再導入アホウドリが小笠原聳島に帰郷(2月)
- ・日本調査隊、ブータンで幻の大蝶確認(10月)

2012年：

- ・カワウソ絶滅宣言！
- ・野生化トキのふ化（4月22日）、8羽全羽巣立ち（6月21日）！
- ・第4次レッドリスト発表（8月28日）
- ・“絶滅”のミズナギドリ小笠原に生息！（2月8日）

2013年：

- ・ウズラの狩猟鳥獣指定が解除され、希少鳥獣に（6月）
- ・種の保存法改正（6月）
- ・ツシマヤマネコ15年間無断飼育に厳重注意（11月）

2014年：ニホンウナギ、IUCNで絶滅危惧IB類に（6月）

2015年：

- ・オオタカの国内希少動植物種からの指定解除の検討
- ・小笠原でヒナの移送により戦後初めてアホウドリが繁殖に成功（3月）
- ・ニホンザルがライチョウのヒナ捕食 調査で確認（9月）
- ・コウノトリ放鳥開始10年 飛来40府県に 豊岡（9月）

2017年：

- ・コウノトリ、ついに全都道府県で確認 放鳥開始後12年（8月）
- ・もしかしてニホンカワウソ？対馬で撮影 12年に絶滅種（8月）
- ・オオタカの希少鳥獣の指定解除（9月）
- ・国内希少野生動植物種の新規指定（9月）

2018年：

- ・長野県中川村でブッポウソウが消え JR 東海がリニア関連工事を中断（7月）

2019年：

- ・レッドリスト見直し、トキが野生絶滅から絶滅危惧種へ（1月）
- ・豪でネズミの一種、地球温暖化影響で哺乳類初の絶滅か（2月）
- ・CITESでコツメカワウソ国際取引禁止を決定（8月）
- ・森林火災で大量死、コアラ絶滅の危惧強まる オーストラリア（11月）
- ・高山生態系10道県で危機、今世紀末推計 温暖化で生息地失う（12月）

2020年：

- ・野生生物が「壊滅的減少」過去50年で3分の2が減る—WWF（9月）
- ・受難のコアラ6万匹超豪の大規模森林火災—WWF（12月）

2021年：

- ・沖縄のジュゴン絶滅との論文発表が波紋広げる（5～6月）
- ・北海道池田町で被害農家の男がタンチョウを射殺（6月）

(2) 獣害等の被害をもたらす野生生物に関するもの

整理の結果、26件のニュースがあった。ほぼ毎年ニュースとして選ばれている。ツキノワグマ、ヒグマ等による被害に関するニュース、鳥獣保護法（「鳥獣の保護及び管理並びに狩猟の適正化に関する法律」）に関するニュースも挙げられている。

2009年：

- ・乗鞍で観光客9人がクマに襲われる（9月）
- ・鳥獣害対策等も事業仕分けの対象に（11月）

2010年：

- ・静岡県でかみつきザルが大暴れ（8～9月）
- ・2006年に次ぐクマ大量出没で事故多発（9～11月）

2011年：札幌で市街地でのヒグマ出没相次ぐ（10～11月）

2012年：福島県等の狩猟者減少！

2013年：

- ・福島第1原発周辺でイノシシやサルが昼間住宅地周辺に出没（7月）
- ・白神山地、世界遺産にシカ迫る（10月）
- ・鳥獣保護法改正に向けてのパブコメ実施（11月）
- ・ニホンジカ捕獲目標数設定へ（12月）
- ・クマが金沢城に登城！で公園が一日閉鎖（12月）

2014年：

- ・改正鳥獣保護法が公布（5月）
- ・ツキノワグマ大量出没&人身事故（8～10月）

2015年：

- ・改正鳥獣保護法施行（5月）
- ・西伊豆町、自作の電気柵で2名感電死された事件（7月）

2016年：

- ・ツキノワグマ人身事故4名死亡 駆除のクマの胃から人体の一部 襲って食べたか 秋田鹿角市（6月）
- ・イノシシに襲われ死亡（群馬県桐生市）（11月）
- ・兵庫県で20年ぶりにツキノワグマ狩猟を解禁（11月）

2017年：

- ・鳥獣害対策、ジビエ頼みに警鐘 商品化でミスマッチも（5月）

・鳥獣捕獲、水増しに防止策 証拠写真を厳格化・「尾」提出 農水省方針（8月）

2018年：

・利尻島にヒグマが106年ぶりに上陸（6月）

・北海道でシカ狩猟中の誤射により国有林職員死亡（11月）

2019年：ヒグマの駆除、北海道（8月）

2020年：山梨県猟友会、シカ捕獲数水増しで過大受給（3月）

2021年：

・札幌市東区でヒグマが暴れ4人が負傷(6月)：北海道でヒグマによる死傷者過去最多(6～7月)

・ヒグマ駆除で発砲、安全性巡り対立 猟銃許可取り消し訴訟17日判決（12月）

4. 考察

整理作業の結果、ニュースとして多く選ばれていたのは、生物では、クマ（ツキノワグマ、ヒグマ）、ニホンジカ、イノシシ、ニホンザルといった、現在、私たち人間に被害をもたらすことで問題とされている生物⁵⁾、そして、トキやアホウドリといった、絶滅危惧種であり、現在、野生復帰や再導入が取り組まれている生物である。地名では、沖縄、北海道、小笠原のニュースが多く選ばれ、世界自然遺産に登録されるような貴重な自然環境がある場所であった。これらの場所では、野生生物の保護に関するものだけではなく、外来種の駆除、野生生物による被害、密猟、自然災害もニュースとして選ばれていた。そして、ニュース全体としては、絶滅危惧種に関するもの、獣害等の被害をもたらす野生生物に関する内容が多く選ばれていた。以上をふまえれば、日本における野生生物に関する問題では、絶滅危惧種といった「保護」に関する問題、そして、獣害等の「被害」に関する問題の2つが、重要な問題として位置づけられていることがわかる。

ここでは、ニュースで多く選ばれていた生物を通じて、日本における野生生物をめぐる「保護」と「被害」の関係について考察したい。

生物で最も多く選ばれていたクマ（ツキノワグマ、ヒグマ）について、前者は本州以南、後者は北海道に生息する。両者ともに生息分布の拡大や森林内のえさ不足、農山村の過疎高齢化、狩猟者の減少等で、人里に出没し、人身事故を含め被害を与えることが問題視されている。特にクマによる人身事故は人間側の死に直結することが多く、そのためニュースとして報道され、印象に残るということも多く選ばれていることに関係しているだろう。ヒグマについては後期（2018年～2021年）ではほぼ毎年ニュースとして選ばれており、近年特に問題となっていることが伺える。高橋（2022）は北海道内の全市町村を対象に2022年にアンケート調査を実施し、ヒグマが生息していると回答した113

自治体のうち、ヒグマと住民との関係が課題として「非常に重要」と回答したのは 80 自治体、「まあ重要」と回答したのは 27 自治体であり、具体的な課題としては農作物被害や人身被害、市街地への出没が挙げられていたことを報告している。

このように「被害」の視点で捉えられることが多いが、ツキノワグマもヒグマも、森林生態系の頂点に位置する生物であり、生息するエリアによっては環境省レッドリストの「絶滅のおそれのある地域個体群 (LP)」の指定を受けている⁶⁾。特にツキノワグマは九州ではすでに絶滅したと推定され、四国では数十頭の生息であり保護活動も展開されている⁷⁾。今回多く選ばれた生物でいえば、トキやアホウドリが「保護」の視点、ツキノワグマやヒグマが「被害」の視点からのニュースであったが、「被害」の視点と同時に本来は生息環境の保全や生息数管理も含めた「保護」の視点でも考えていかなければならない生物である。

一方で、「保護」の視点で捉えられる絶滅危惧種も「被害」の視点でニュースとなっていた。2021 年のニュース「北海道池田町で被害農家の男がタンチョウを射殺 (6 月)」は、「保護」と「被害」の軋轢を報じるものであった。タンチョウは環境省レッドリストでは「絶滅危惧Ⅱ類」に指定され、1952 年には「特別天然記念物」に指定されている。近年では農作物被害、牛舎への侵入が問題視され、スラリーストア (糞尿貯留槽) への転落事故も発生し、環境省もこれらの対策を呼びかけている⁸⁾。しかしニュースで報じられたように、結果として追い払いのための空気銃が命中し「射殺」という事態に至ってしまった⁹⁾。

また、今回「保護」に関するニュースで多く選ばれていたトキについても、将来的には「被害」の視点で捉えられる可能性がある。一部報道ですでに「害鳥」として報道する向きもあるが¹⁰⁾、筆者が佐渡市に確認をとったところ、現時点では被害として問題視されておらず (本田, 2022)、筆者が 2019 年に実施した市民アンケート調査でも害鳥視されている認識は確認されていない (本田, 2019)。ただし、今後の動向には十分留意する必要がある。

日本では野生生物の生息地と人間の生活エリアの多くが重複しているため、野生生物に関する問題を考える際には、このような「保護」と「被害」の軋轢は避けて通れない。先行研究でも、保護により生息数が増加していくにつれて発生する農業被害等の課題が指摘されてきた (例えば、渡辺, 2001 ; 丸山, 2006 ; 正富ほか, 2018)。そのため、ある野生生物に対して、「保護」だけの視点、また「被害」だけの視点で捉えるのではなく、「保護」の視点、「被害」の視点の両方を包含する視点をもつことが重要である。環境社会学者の宮内泰介は「順応的ガバナンス」の可能性を提起している。「順応的ガバナンス」は、「環境保全や自然資源管理のための社会的しくみ、制度、価値を、その地域ごと、そ

の時代ごとに順応的に変化させながら、試行錯誤していく協働のガバナンスのあり方」(宮内, 2013 : 25-26) とし、そのポイントとして、①試行錯誤とダイナミズムを保証する、②多面的な価値を大事にし、複数のゴールを考える、③多様な市民による調査活動や学びを軸としつつ、大きな物語を飼いならして、地域のなかでの再文脈化を図る、の3点を挙げている(宮内, 2013 : 24)。

野生生物をめぐる問題を考える際には「順応的ガバナンス」のように順応的な対応や多面的な価値をもって野生生物と関わるのが重要であろう。ただし、問題を解決するには、環境省等の関係省庁や自治体、そして研究者や専門家、市民団体の力が必要であるが、最も必要なのはそこで生活する住民の力である。住民が参加できなければ、「順応的ガバナンス」は机上の空論になってしまうし、住民は野生生物との共生を強制される、いわば「強いられた共生」に陥ってしまう¹⁾。そのためには、住民が野生生物をどのように捉えているのか、その認識に焦点をあてて、住民が問題に関わる道筋を考えていくことこそ必要である。野生生物をめぐる問題の答えは現場にある、と筆者は考える。

筆者は野生復帰の対象となる生物、すなわち、コウノトリ、トキ、そして将来的に実施が検討されているツシマヤマネコを事例にこれまで地域住民の認識について調査研究を行ってきた。本報告での野生生物に関するニュースの整理を通じて、ニュースとして多く選ばれた生物、地名、内容を確認でき、「保護」と「被害」の両方を包含する視点の重要性を再認識できた。前述のようにトキは「被害」の視点から報道され始めており、コウノトリやツシマヤマネコも「害鳥」や「害獣」という認識もかつてはあった。これらの生物がそれぞれの生息する地域で住民と持続可能な関係を構築していくためには、どのように「保護」と「被害」の両方を包含した視点を提示することができるのか、そして住民が関わることができるのか。引き続きの課題としたい。

5. おわりに

本報告では、野生生物に関するニュースをふりかえることで、この10数年でどのようなニュースがあるのかについて整理した。ニュースとして多く選ばれていたのは、沖縄、北海道、小笠原といった、自然環境が多くあるエリアとなるが、例えば東京都内でも絶滅危惧種や外来種は生息し、クマやシカ、イノシシやサルも出没している。本報告を契機に、記載したニュースについて、興味関心のある内容を掘り下げて調べるだけでなく、自分が住んでいるエリアではどのような野生生物が生息しているのか、野生生物に関するニュースとしてどのようなものがあるのかについても是非調べてもらいたい。

本報告で用いた「野生生物10大ニュース」では今後どのようなニュースが選ばれるのか、整理作業を続けていきたい。

注

- 1) “Sustainable Development Report 2022” Japan (2023.1.5 参照)
<https://dashboards.sdgindex.org/profiles/japan>
- 2) 「レッドリスト指数」とは、種群間の絶滅リスク総量の変化を測定する指数であり、日本全体での生物種の絶滅リスクの傾向を示すものとされる。
- 3) 「野生生物と社会」学会は、野生生物と人との多様な関係性を対象とする幅広い学問分野のプラットフォームを目指し、会員は自然科学、社会科学、人文科学あるいはこれらを横断する学術研究を専門とし、また実践的な活動に取り組んでいる専門家や行政職員、学生等を含む。
「野生生物と社会」学会 (2023.1.9 参照)
<http://www.wildlife-humansociety.org/index.html>
- 4) 「野生生物と社会」学会：「野生生物 10 大ニュース」(2023.1.9 参照)
<http://www.wildlife-humansociety.org/gyousei/gyo-jisyu/gyo-jisyu.html#2021news>
- 5) ただし、イノシシについては豚熱 (CSF：旧豚コレラ) の影響を報じるニュースが 2018 年、2019 年、2021 年に選ばれており、この動向については引き続き注視する必要がある。
農林水産省「豚熱 (CSF) について」(2023.1.5 参照)
<https://www.maff.go.jp/j/syouan/douei/csf/index.html>
- 6) 【哺乳類】環境省レッドリスト 2020 (2023.1.9 参照)
<https://www.env.go.jp/content/900515981.pdf>
- 7) 日本自然保護協会「絶滅危惧種を守る：ツキノワグマが暮らせる自然を四国に残す」(2023.1.9 参照)
<https://www.nacsj.or.jp/sp-topics05/>
- 8) 環境省北海道地方環境事務所「タンチョウによる農業被害の対策について～タンチョウと共存するために～」(2023.1.9 参照)
<https://hokkaido.env.go.jp/content/000070375.pdf>
- 9) 日本経済新聞「タンチョウ射殺疑い 農家男性書類送検、北海道」(2023.1.9 参照)
<https://www.nikkei.com/article/DGXZQOUE0443V0U1A001C2000000/>
- 10) デイリー新潮「トキが増え過ぎて『もはや害鳥』佐渡の住民が困惑」(2023.1.9 参照)
<https://www.dailyshincho.jp/article/2020/03020556/?all=1>
- 11) 野生生物保護の推進のため生息地付近の住民に「強いられた共生」をもたらすよう

な事例は散見されてきた。例えばコウノトリの野生復帰については、野生復帰を推進する行政が「コウノトリとの共生」を推進していく中で、「強いられた共生」になりかねないことが当初危惧された（本田，2005）。

文献

- 本田裕子（2005）「地域住民による野生生物保護へのかかわり—『共生』とどうつきあうか？豊岡市コウノトリの野生復帰計画を事例に」『エコソフィア』16：87-97.
- 本田裕子（2019）「放鳥10年を迎えたトキの野生復帰におけるトキに対する住民の認識についての一考察」『環境情報科学論文集』33：247-252.
- 本田裕子（2022）「トキをめぐる報道から考えるメディアと研究者とのかかわり方」『ワイルドライフフォーラム誌』26（2）：26-31.
- 丸山康司（2006）『サルと人間の環境問題—ニホンザルをめぐる自然保護と獣害のはざまから』昭和堂.
- 正富浩之・正富欣之・安田直人・音成邦仁・小山内恵子・古賀公也（2018）「特集2 タンチョウに今何が起きているのか—過密化した個体群の悩み—」『ワイルドライフフォーラム誌』23（1）：13-23.
- 宮内泰介（2013）「なぜ環境保全はうまくいかないのか 順応的ガバナンスの可能性」宮内泰介編『なぜ環境保全はうまくいかないのか 現場から考える「順応的ガバナンス」の可能性』新泉社：14-28.
- 高橋正弘（2022）「北海道の自治体におけるヒグマをめぐる環境教育の取り組み状況について」『環境情報科学論文集』36：244-249.
- 渡辺伸一（2001）「保護獣による農業被害への対応—『奈良のシカ』の事例—」『環境社会学研究』7：129-144.